



市内外で幅広く活躍する青儀さん

輝いています

ひと

オカリナ奏者

あおぎ のり ゆき
青儀 憲行 さん

柔らかい音色で笑顔の花を

陶 器製の愛器から音色を響かせ、多くの人の心に癒やしを届けている、オカリナ奏者の青儀憲行さん（67歳・北町4丁目）。中央公民館で活動し、代表を務めている「オカリナ虹」（会員22人）をはじめ、幾つものユニットを掛け持ちし、その演奏で笑顔の花を咲かせています。

「もともとは体育会系で、音楽って柄じゃなかったんですよ」と、はにかむ青儀さん。その生活が一変したのは、医療機器メーカーの管理職として多忙を極めていた20年ほど前のことでした。友人に誘われて参加した公民館の講座で、初めてオカリナの生音を耳にすると、おもしろが乗っていた

ような心がすつと軽くなり、瞬く間にそのとりこに。以来、自らも人の心に響く音色を奏でたいと腕を磨いてきました。

現在はいくゆるや公民館をはじめ、カフェなどで演奏を披露し、その数は年間70回近くに上ります。そうした精力的な活動も、「汗をかき、恥をかきながら励んでいます」と、ご謙遜。そんな青儀さんが長年続けている取り組みが、高齢者施設の慰問です。親しみやすい選曲と軽妙な語り、一体感あふれる合唱を交えたステージは大好評。笑いあり涙ありのひとときを心待ちにするファンも多く、各施設からの依頼が絶えないほどです。そういつたうれい声にも、「ボランティアを通じて、私のほうが勇気づけられているんですよ」と、ほほえみます。

素朴でどこか懐かしいオカリナの音色に魅せられて20年。この間に会ったさまざまな人との交流こそが、「かけがえない財産ですね」と、目を細める青儀さん。今年の夏には信濃わらび山荘で野外ライブを計画するなど、活動意欲は高まるばかりです。これからは周囲をひきつける陽気な人柄と柔らかい音色で、まちを優しく包み込んでいきます。

今月の河鍋暁斎記念美術館

天才絵師の作品 蔵にあり

— No. 9 —



現在の茨城県古河市で生まれる。浮世絵や狩野派を学び、江戸・東京の庶民から人気を博す。明治9年、万国博覧会に肉筆画を出品。14年、内国勲業博覧会で日本画の最高賞受賞。娘の暁翠も日本画家。



かわなべ きょうさい
河鍋 暁斎
天保2年(1831)
～明治22年(1889)

暁斎の娘・暁翠が描いた西年の大小暦です。鶏と太鼓の組み合わせは、「諫鼓鶏」という画題です。古代中国、治世をいさめた人民が鳴らす諫鼓を設置しましたが、良政が続き鼓に苔が生え、鶏が遊びだしました。そこでこの画題は太平の象徴となったのです。鶏の白い羽は、色を付けずに摺って凹凸を出す「空摺り」の技法が用いられています。



暁翠筆「明治四十二西略暦(諫鼓鶏)」
明治42年(1909) 摺物 色摺

河鍋暁斎記念美術館 期間＝2月25日(土)まで
「新春開運 七福神と西年の祝い」展
同時開催「野坂稔和 波の戯画展Part.2」展

開館＝午前10時～午後4時
休館＝木曜日 毎月26日～末日
ところ＝南町4-36-4
入館料＝一般540円
中学生～大学生430円
小学生以下210円
(20人以上の団体は要予約)
詳細＝同館 ☎441-9780



展覧会の詳しい内容は美術館のホームページをご参照ください



暁翠は明治元年生まれ。幼い頃から父親に絵を学び、17歳から展覧会へ出品を始め、20代で褒状を受章し、現在の女子美術大学草創期(明治35年～38年頃)に日本画を教えた女流画家です。